母乳栄養に関する疫学的研究

班　　員	平山宗宏	（東京大学母子保健）
	山内逸郎	（国立岡山病院）
研究協力者	前田和甫	（東京大学疫学）
	畠山富而	（岩手医大小児科）
	高野　陽	（国立公衆衛生院）
	南部春生	（北海道社保中央病院）
	橋本武夫	（聖マリア病院）
調査協力者	五十嵐郁子	（国立岡山病院）
	石井朗夫	（日野市立総合病院）
	斉藤　実	（東京大学母子保健）
	庄司淳一	（日光総合病院）
	中江公裕	（東京大学疫学）
	野末悦子	（川崎市久地診療所）
	日暮　真	（東京大学母子保健）
	藤井とし	（都立築地産院）
	堀口貞夫	（　〃　）
	村瀬溥太郎	（沼津市立病院）
	米山国義	（八王子市米山病院）
	渡辺言夫	（杏林大学小児科）

研究の目的：

母乳栄養の意義については，栄養学的，感染防禦，心理学的，内分泌学的等多方面から利点があげられているが，推計学上の評価にたえる科学的研究資料はとぼしい現状である。

そこで母乳の意義を，発育および罹患状況の二面から計画的に立案された疫学的手法を用いて検討することを目的として研究を実施した。なお発育に関する部分については発育研究班（高石昌弘班員）においてとりまとめを行なうこととし，協同研究を実施した。

研究の方法：

本研究グループにおいて数回の会合によって作製した乳児発育調査表（別添）(1)(2)の各事項についての調査を協同して行ない，東大疫学教室にて集計を担当することとした。

調査対象：

調査協力施設において出生し，または収容された児を生後12ケ月間追跡する。周産期に明らかに異常のあったもの，低体重出生児は除外することとした。

対象児はその施設において毎月齢ごとに健康診査を行ない，身体計測，身体所見，精神運動機能発達状況，栄養法，罹患状況を調べる。ただし施設の事情によっては，健診間隔は毎月齢でなくともよい。また発育および罹患の季節変動を考慮に入れて，全季節を通じて対象をほぼ同数選択することとした。

調査表記入方法の申し合わせとしては，「乳児発育調査表記入要領」を作製し，これによることとした。調査集計の方針については前田報告書に述べられたとおりである。

このほか各班員，研究協力者ごとに独自の調査研究が実施できる時は，それぞれとりまとめの上報告することとした。

研究成績：

(1) 追跡調査

本協同研究は昭和50年10月に開始したので，51年3月現在追跡調査がその緒についたところであり，中央集計には至っていないが，これまでに追跡をはじめた小児は，新生児期の栄養方法として，母乳栄養児304，混合栄養児103，人工栄養児74，合計481例である。（表）

本研究班の研究者は母乳栄養を積極的に推進してきたものが多いため，上記対象児に母乳栄養児が大多数をしめてしまったので，今後対照としての人工栄養児例を得るため，調査協力機関を増す必要がある。

なお本研究でいう新生児期の母乳栄養児は，夜間の哺乳にも人工乳を用いずに母乳または糖水を与えたものである。

これまでのところ調査開始後日が浅く，例数も少ないので，発育，罹患状況等につき明らかな差をみとめるには至っていない。

(2) 個別調査成績

班員研究協力者ごとに調査を実施した個別の成績については添付の各報告書のごとくであった。その要約は以下のとおりである。

表　昭和５１年２月現在追跡調査実施状況

調査担当（順不同）	新生児期栄養法			備　　考
	母乳	混合	人工	
南　部	0	28	1	１月時母乳１０，混合１４，人工５ 今後は新生児期の母乳のみの栄養児をふやす予定。罹患傾向に差みとめず。
石　井	30	21	11	追跡状況順調
橋　本	15		12	罹患傾向，これまでには差みとめず
山　内	45	10	10	同　　上
畠　山	86		10	３町にて継続中。５０年１０月生以降が対象
藤　井 堀　口	17			２月時母乳７，混合４ 全例に１～３月の間に軽度湿疹を顔面にみとめる
庄　司 平　山		20	20	新生児期の母乳のみの栄養児をふやす予定。現在罹患傾向の差なし
米　山 渡　辺 日　暮	19	17	3	母乳児中混合栄養になったもの　１月で4，２月で6，３月で1 混合栄養児中人工栄養になったもの　１月で4，２月で1，３月で1
神　岡 高　石	68			混合，人工栄養児も加わる予定
沢　田	40	2	2	人工栄養のある調査機関を加える予定
野　末 高　野	14			１月時母乳１１，混合３ ３月時母乳７，混合３
村　瀬	10	7	7	現在のところ罹患状況，発育に差みとめていない
合　計	344	105	76	

平山：母子衛生研究会を通じて収集した全国約30の大中都市における乳児健康状態調査によれば，月齢３月までの920例についてみると，何らかの疾患の罹患率が母乳栄養児を１とした時混合1.5，人工1.6であった。

疾患のうち熱のないかぜが同じ順序で1：4.7：4.9，　下痢が1：2.3：2.0　でいずれも母乳栄養児の罹患率が低かった。

山内：昭和46年以降の完全人乳方式で哺乳した6,247例と，それ以前の5,703例の新生児の髄膜炎発生例数を比較したところ，人乳方式にして以後の発生例数は０であり，それ以前では３例（２例は出生直後より人工，１例は混合栄養であり，１例は新生児期に，他の２例は脳性まひを残し，

幼児期に死亡している。）

前田：追跡調査を実施するに当り，可能な限り客観的な免疫学的調査を行うための条件を検討策定した。その結果用いることとした調査表は別添の如くである。

畠山：岩手県下2町における調査成績を中間期にとりまとめたところ，母乳栄養児の上下気道炎の罹患率が混合ないし人工栄養群に比して低いことが証明された。下痢の罹病率も低く，受療日数も短かかった。

高野：沖縄県八重山群島における母乳栄養の実態調査を実施した。母親で職業をもつものが29％あったためか，生後7日以内の母乳栄養児は39％に止っていたが，安易に人工栄養にうつっていることが知られた。母乳栄養を推進するためには，母の条件，地域の特性を考慮して指導する必要がある。

南部：育児についてのアンケート調査を実施したところ，乳汁ののみ具合を非常に心配しているほか，育児の不安がつよい傾向がうかがわれた。

橋本：High Risk Pregnant から生まれる High Risk Infant を完全母乳栄養でそだてる試みを救急産科において実施したが，209例中205例（98.1％）について成功した。残る4例は，母親の心臓病，結核，精神病，分泌不良（巨大児）であった。

また母乳栄養を推進している地域を調査したところ，非常に低い死亡率であった。またこの地域では遅延性黄疸児の頻度は高いようであった。

栄養法別にみた乳児の罹患状況の比較

班　　員　平山宗宏
（東京大学母子保健）
調査協力者　斉藤　実

調査の目的：

栄養法による乳児期の疾病罹患率に差があるかどうかを知るために調査を実施した。

調査の方法：

全国約30の大中都市における育児教室に際しアンケート調査を依頼し，母子衛生研究会を通じて回収集計した。

栄養法は産科，産院の退院時の状況により分類し，月齢3月までの罹患状況，月齢4月以降の罹患状況の差を比較した。

調査成績：

表に要約して示したごとくである。3ケ月までの状況は母乳211，混合483，人工226の計920

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究の目的:

母乳栄養の意義については, 栄養学的, 感染防禦, 心理学的, 内分泌学的等多方面から利点があげられているが, 推計学上の評価にたえる科学的研究資料はとぼしい現状である。

そこで母乳の意義を, 発育および罹患状況の二面から計画的に立案された疫学的手法を用いて検討することを目的として研究を実施した。なお発育に関する部分については発育研究班(高石昌弘班員)においてとりまとめを行なうこととし, 協同研究を実施した。